

この文章は、高橋幾京先生が遠絡医学セミナーを受講された際の感想文です。遠絡医学そして遠絡療法を学んでおられる先生の心境と状況をご理解いただくために資料としてご本人の許可の下に掲載させていただきました。ご参考の一助としていただければ幸いです。

子供のころからの 夢の実現



たかはし ききょう
高橋 幾京 きざわ整形外科内科 / 埼玉

私と遠絡療法との出会いは、平成 18 年の末頃届いた一通の遠絡療法からのダイレクトメールからでした。早速受講したセミナーでの率直な感想は、「脳外科医の頭ではとても理解できない」というものでした。

その後、初級コースの終了後基本的な治療を、患者さんに試したところ、数人の方の症状が著しく改善したのです。驚きの中で遠絡療法を取り入れたいと真剣に思った瞬間でした。振り返ればこの 20 年来、これ程熱意を持って取り組みたいと思えるものを久しく忘れておりました。

脳外科専門医として自分なりに「医療」と云うものを自負してきたつもりでしたが、反面現代西洋医学に限界を感じていたことも事実です。平成 7 年の開業に際しては、東洋医学を取り入れてより幅広い医療をしたいとの思いから、独学で漢方と鍼治療を学び、日々の診療に生かしておりました。

しかし一方では、交通事故で頸部捻挫を受傷した患者さんに、漢方薬、薬物療法や牽引などの物理療法、時にはブロック注射や鍼治療等を駆使しても、その結果に十分に満足して頂けたとは思えないことも多々あって行き詰まりを感じていました。

そのような日々の中で遠絡療法に巡り会い、脳外科医の常識ではまだ十分に理解出来ないまでも、患者さんの苦しみを取りたい一心で治療に取り組みました。思い起こせば、小学 1 年生の頃にアメリカの脳外科医を題材にした TV ドラマ「ベン・ケーシー物語」が放送され、幼心に脳外科医にも憧れていました。今思えば、子供のそこはかたない願いだっただけなのでしょうが、不思議と、将来、医師以外になっている自分を考えたことは殆どありませんでした。

その後、当時の日本ではまだ草分け的存在であった長崎大学の脳外科の医局に入り、本当に脳外科医になってしまった次第です。しかし皮肉にもその特殊な専門性故に将来、無医村に行こうと云う夢を果たすことが難しくなってしまった事も事実でした。

しかし、苦しんでいる人に対して自分で出来ることはしてあげたいとの理由から、脳外科以外の症状でも可能な限り自分で対応し、不十分であれば専門医に紹介すると云うスタンスは、今日まで絶対に曲げないで来ました。また、医学の常識から考えれば邪道なのかも知れませんが、私の日々の診療の原則は、診断を確定させることは確かに大切なことですが、まずは患者さんの症状が改善して楽になって頂くことが第一と考えています。

遠絡療法に巡り会うことが出来たおかげで、へき地医療に貢献したいとの幼い頃の思いを再び思い起こさせてくれました。

いつの日か、まともな設備もないであろう医療過疎地に行き、遠絡療法だけで人々の治療が出来るのであれば、こんなに素敵なことはないのではないのでしょうか？